

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第26号

空中回廊

この企画展は感激を分かちあえる[杉本健吉展] / 会員のひろば / 愛知県美術館コレクションから[版画家としてのカンディンスキー] / 講座ダイジェスト[西洋美術バロック美術の光と影] / 友の会活動紹介



ヴァシリー・カンディンスキー 《夕暮れ》1903年

○この企画展は感激を分かちあえる○

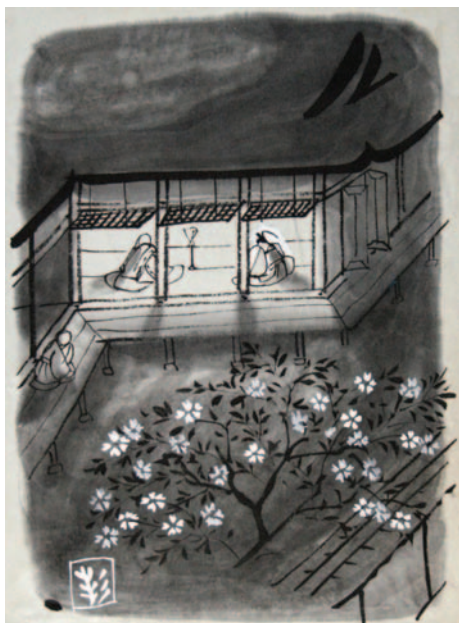
新収蔵記念 杉本健吉展

2008年4月4日(金) から 6月1日(日) まで開催

自分の作品を我が子のように愛しんでいた画家・杉本健吉は、自分の作品を売ることができませんでした。金銭よりも、作品が多くの人目に触れることを望んだのです。平成16年に98歳で生涯を終えた彼の遺志によって、油彩画、水彩・素描など千点を超える作品が愛知県美術館に寄贈されました。今回の展覧会では、その多くが初公開となるこれらの作品を中心に、年代ごとの代表的な作品を合わせて展示しています。

挿絵は画家の文学

吉川英治の連載小説『新・平家物語』は昭和25年から32年まで週刊朝日に掲載され、杉本健吉は第36回から第355回まで7年間にわたって挿絵を描きました。原稿の出来上がりは締め切りぎりぎりのことが多く、1回分の挿絵数点を一晩で仕上げなくてはいけないこともありました。物語にふさわしい挿絵を描くために、時代研究も怠りなく、時には作家と共に取材旅行にも出掛けています。最終回は予定を大幅に超える原稿の枚数と締め切り時間とのせめぎあいとなり、吉川宅に詰めて原稿を待っていました。7年にも及ぶ仕事が終わった時の感慨はいかばかりだったのでしょうか。



「幽宮訪鶯記」(『新・平家物語』刊行本第10巻)

たでしょうか。

挿絵には夜の場面を描いたものがたくさんあります。墨の巧みな使い方によって、月夜の深深とした空気や、梅の咲く春の宵を、まるで色彩が



「灼身大佛・嘲人間愚」(『小説週刊朝日 新・平家物語』のための下絵)

あるかのように感じさせています。闇を照らす明かりや炎、木々の上に降り積もった雪、穏やかな波の海や流れ落ちる滝の水などを、黒と白の二色だけで自在に表現しています。また、素早い筆の運びによって描かれた人物像には、その人柄や場面の心情が豊かに表現されています。大勢の人物が描かれた場面でも、一人ひとりの異なる動き、表情が丁寧に描き分けられているのがわかります。そして、取材旅行で目にした物語の舞台となった場所の風景も、建物や人物と組み合わせて構図の中に取り入れられています。小説の脇役としての挿絵という次元に留まらない芸術性の高さが、画家としての評価につながり、全国的に認知される名声を得るに至ったのです。

更に、連載終了後も単行本、全集など発行される書籍ごとに挿絵を描き改め、同じ場面を何度も繰り返し描きました。杉本美術館開館に合わせて作成した屏風のために描いたときには6度目になっていました。繰り返し描くことによって、

新たな描法を発見していくことにもなったのです。円窓や扇面の中に描かれた場面や、登場人物の名前や和歌などの文字が書き添えられたものなど、日本的な装飾性が挿絵の味わいを深くしています。今回の展覧会では、同じ場面を描いた挿絵がどのように描き変えられていったのかということも比較して見られるように展示されています。



「夢占い」（『画帖 新平家物語扇面』より）

「生まれる絵をあこがれます」

杉本健吉の絵を目にするとき、画家が描きながら感じていたことがありありと伝わってくる場合があります。奈良の博物館を描いた作品からは、天井から差し込む澄んだ光や、仏像の置かれている静かな展示室に心落ち着くものを感じることが、抑えた色調やゆったりとした空間表現から受け取れます。奈良や京都の風景は、ある場所では下から高い山を見上げているように描かれ、また別の場所では足元に深い谷を見下ろすように描かれ、時には遠く遥かに見渡したように描かれ、というように心の中に生まれてくる絵が描かれています。新鮮な感動を画面に描くために、現場での制作を重んじていました。凝った構図や手の込んだ描き込みよりも、その場所での感激を新鮮なうちに夢中に描くことに喜びを感じていたのです。晩年になっても、京都や奈良に雪が降ったという情報が入ると、いち早くスケッチに出かけて行きました。彼の絵に雪景色が多いのは、普段見慣れている景色が雪によって新鮮な感動を生み出す場所が変わるからです。

海外でも現場制作主義を通していました。不自然に曲がった道や、傾いている建物が描かれていても、そこからは初めて目にする異国の風景に対する感激が伝わってきます。バランスを欠いたように見える画面が、そのときの感動の大きさを表しているように見えるのです。

作品の中に素描が多いのは、見たものをその

場ですぐに描いたためです。しかし、それは下絵ではありません。彼にとって、素描と油彩画は描く道具が違うだけで、完成作品として求めるものは同じ、生き生きとした線でした。太平洋戦争中は画材を手に入れるのが難しくなり、自ずと木炭や鉛筆、墨などによる素描を描くようになりました。しかも、素描の枠を超えるような大きな作品を木炭やコンテで描いています。この時期に素描に打ち込んだことが、勢いのある筆遣いや大らかな造形をもった独自の画風を築く礎になったのです。

最晩年には、オブジェや幡^{ぼん}の制作に熱中しました。また、92歳を過ぎてからは自画像を多く描くようになりました。昆虫や植物で作った《自然からの勲章》という自作の勲章を身に付けた自画像からはユーモアあふれる人柄がにじみ出ています。彼の自画像の前に立つと、思わず話しかけたくなくなってしまいます。彼が亡くなった後も、作品は生きているのです。是非、ご自身の目で確かめてみて下さい。



《セベリア》1980年 コンテ・水彩、紙

※記事は本展覧会を担当された深山主任学芸員へのインタビューをもとに構成しました。（折戸）

○会員のひろば○

リサイクル楽器ワークショップ 他館鑑賞会〔名古屋ボストン美術館〕

◎リサイクル楽器ワークショップ

昨年9月、「サイクルとリサイクル」展にあわせて、友の会では「リサイクル楽器ワークショップ」を開催しました。

打楽器のアンサンブルグループ「BIRTH」の5人組を講師にお迎えして、前半では講師演奏を鑑賞しました。使った楽器(?)はバケツや新聞紙など。リズムカルに新聞紙を揺らしたり裂いたりして「演奏」し、裂いた新聞紙をこれ



またリズムカルに紙に貼り付け「BIRTH」の文字を完成させるパフォーマンスが印象的でした。

後半では、日常生活から出る不用品を「リサイクル」して、講師の指導のもといろいろな楽器を制作しました。最後に、参加者と講師が全員で合奏しました。「会員だけで楽しむにはもったいない」といった声もあったほど、とても盛り上がったイベントでした。(森)

◎他館鑑賞会〔名古屋ボストン美術館〕

1月20日、馬場駿吉館長（元友の会理事、現会員）のお招きにより、名古屋ボストン美術館にて開催中の「ボストン美術館浮世絵名品展」を楽しみました。

始めに鏡味千佳学芸員による、名品展のレクチャー。当展示会の目玉や江戸の粋について詳しく教えていただきました。私は単に浮世絵の大胆な構図が好きだったのですが、お話を聞いて今から観る浮世絵の価値を知り余計にワクワクしながら会場へ。



漆の黒々とした色、はかなげな桜色、着物の藍色。浮世絵でデザインだけでなく色に感動したのは初めての経験です。もちろん最初に受けたレクチャーのおかげで一枚ずつ知恵を絞って解釈し、心ゆくまで堪能することができました。

(松下)

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

もうひとつの顔

版画家としてのカンディンスキー

抽象絵画の創始者の一人として知られるカンディンスキー（1866-1944）が、絵画を学ぶために祖国ロシアを離れてミュンヘンに出たのは1896年、29歳の時でした。カンディンスキーは生涯に200点ほどの版画を制作しています。200点といっても、それだけの絵柄があるということで、実際に刷られた版画の数はその何倍にもなります。例えば表紙の《夕暮れ》は4つのステートがあり、愛知県美術館の作品は第4ステートなのですが、同じ第4ステートとされている作品は、パリ国立近代美術館に1点、ガブリエーレ・ミュンター財団に2点あります。カンディンスキーの版画は1902年に始まり、画家の40数年の画歴における初期の10年少々の期間に集中して制作されています。版画の種類からいうと、1913-14年にエッチングを制作する以前はほとんどが木版画で、それ以降はドライポイントやリトグラフが増えていきます。1903年制作の《夕暮れ》は、カンディンスキーの最初期の版画に位置づけられます。



参考図版 ポリーソフ＝ムサートフ《ゴブラン織》1901年

画面は左下から右上を結ぶ対角線によって、右下部分と左上部分に大きく二分されます。右下部分はこの作品の前景にあたり、女性の姿がそのほとんどのスペースを占めています。女性は豹柄のような模様が入ったドレスをまとっています。肩からはショールを掛け、左手には扇

子を持っています。頭には鍔広の帽子を被り、帽子を留めるリボンを首で結んでいるようです。画面左下の部分は波打つ水面のようにも見えますが、道を表しているのでしょうか。画面左上部分を占めているのは前景から遠景までですが、中景は黒が支配しているので、遠景に比重が置かれています。中景では正装した男性が画面右に向かって道を歩いている姿が確認できます。その道は前景に表された婦人の帽子の輪郭線と重なり合っていきます。男性の背後には水面が見えており、その奥に列柱を備えた古典風の建物が建っています。そして画面最上部には水色の空が広がっています。この版画には何か物語がありそうですが、カンディンスキーのほとんどの初期版画と同様に、特定の物語を描写したものではないでしょう。

カンディンスキーがミュンヘンで《夕暮れ》を制作した時代、祖国ロシアではカンディンスキーと同じ世代の画家によって象徴主義の美術が隆盛していました。カンディンスキーがミュンヘンに出て数年後に制作した《夕暮れ》には、個々のモチーフをはじめとして同時代のロシアの美術との類似性が認められます。ロシアの世紀末美術に漂う懐古趣味や貴族主義に、ミュンヘンのユーゲントシュティルの装飾性が加味されているところに《夕暮れ》の独自性があります。

(主任学芸員 古田浩俊)

※ご紹介した所蔵作品《夕暮れ》を、本会報表紙に掲載しました。

■学芸員の横顔

古田浩俊（ふるた・ひろとし）
愛知県美術館企画業務課主任学芸員
松本市生まれ。1991年から愛知県美術館の開館準備に就く。木村定三コレクションの受入れに長く携わる。近年関わった展覧会は「ベン・ニコルソン展」「木村定三コレクションによる熊谷守一展」「愛知曼陀羅—東松照明の原風景」「20世紀美術の森」「木村定三コレクション名作展」。趣味はツーリング、合気道。



友の会連続講座 西洋美術「バロック美術の光と影」

2007年9、10月名古屋芸術大学の栗田秀法先生をお迎えして、バロック美術とそれを代表する二人の画家について連続講座を開催しました。

バロック美術とは

バロックとは、いびつな真珠＝バローコ（ポルトガル語）が語源で、ルネサンスの古典主義が墮落した奇妙なものともみなされていた。しかし、美術史家ハインリッヒ・ヴェルフリンは『美術史の基礎概念』（1915年）の中で、ルネサンスとバロックの特質を対立させて次のように記した。これはバロック復権の大きな一歩につながるものだった。

第一にルネサンスでは境界が明瞭で形が背景から浮き彫りになる線的な性格が顕著であるのに対し、バロックではそうではなく、絵画的であるといえる。第二に空間が画面に平行な面の重なりとして与えられるため平面的な印象を与えるルネサンスに対し、バロックは奥への後退が連続的で深奥の印象が際立っている。第三に垂直線と水平線で構成され、画枠の中にきちんと納まり完結している（閉じられた形式）のがルネサンスであり、人物が画枠で切り取られ、対角線方向に構成されることによって枠の外に広がっていく印象を与える（開かれた形式）臨場感あふれる演劇的な絵が多いのがバロックである。第四に独立性をもった細部の集合体として多

数性が特徴のルネサンスに対し、構図全体を支配する統一性が細部を支配するのがバロックである。第五に量感が強調され形態が背景からくっきりと浮かび上がるのがルネサンスの特徴（絶対的明瞭性）であり、巧みな明暗の表現などで形態が空間に溶け込むように表現されるのがバロックの特徴（相対的明瞭性）である。ヴェルフリンによりバロックはルネサンスとは独立したものの見方をもつ様式概念として理解されるようになった。

バロック美術と宗教

中世のネーデルラントは一つの国に纏まっていたが、宗教改革の後にカトリック（旧教）のスペイン領ネーデルラント（フランドル）とプロテスタント（新教）のオランダとに分裂。芸術にも多大な影響を与えた。カトリックでは美術を布教に積極的に利用し、教会を飾る祭壇画の需要が多かった。一方プロテスタントは聖画像を偶像崇拜とみなしたため、教会に宗教画は飾られなかった。このような時代背景があり、フランドルで活動したルーベンスは教会用の宗教画を多く描き、オランダで活躍したレンブラントは肖像画を多く描くことになる。

ルーベンス（1577-1640）

彼の芸術を考える時、次の要点があげられる。フランドルの写実の伝統を踏襲しつつ、古代美術



①ピーテル・パウル・ルーベンス
《アダムとエヴァ》1600年以前



② 同《キリスト昇架》1610-11年



③ 同《パリスの審判》1632-35年

やイタリア美術の先人の名画を下敷きにして独自の構図を生み出していること。肉付きのよい女性像など独自の美の理想を持っていること。単に画家として傑出しているだけでなく、豊かな学識と教養を有する外交官の経歴を持った社会的で貴族に近い紳士であり、毎朝4時起きの勤勉家でもあったこと。そして、工房を組織し優れた経営感覚の持ち主で、花の画家ヤン・ブリューゲルはじめとする専門画家たちを起用したりもしたこと、などである。

これらを踏まえて作品を見ていく。図①はラファエッロの原画に基づく版画を下敷きにしたものである。マニエリスム調の絵で女性の肌が大理石のように冷たく表現されている。中世末期からマリアは嘆き悲しむ姿で描かれることが多かったが、トリエント公会議（1545-63）で聖書原典に立ち戻ることが決まった。図②のマリアも聖書の記述どおり悲しみをじっとこらえて立つ姿で描かれている。図③は彼が最も得意とした神話主題の一つで、最初期から晩年までに7点の作例がある。物語の表現に加え、三方向から見た理想的女性像を3人の女神に割り当てて描いていることがルーベンスならではの工夫である。

レンブラント（1606-69）

新教国オランダ美術の最大の特徴は、当時英国人旅行者が「市民階級の家では、高価ではないがインテリアとして絵が飾られている」と感心したように、市民も絵を所有し鑑賞していたことである。また、色々なジャンルの需要に応えるため画家の分業化が進むとともに、画家の層が厚いことも特徴の一つである。そのような状況のオランダ

でレンブラントはまず《ニコラス・ルッツの肖像画》によって肖像画家としての名声を得た。図④は集団肖像画家として社会的名声を確立するきっかけとなった作品である。「解剖学講義」という主題表現を第一とし、その中で個人の肖像を表現、ドラマチックな光の効果により博士と聴講者の緊調関係を見事に捉え、新しい集団肖像画を作りあげた。帽子を被っていることで博士は上層階級だと分かる。解剖は腹部から始めるが、公の場所に飾られる為レンブラントはあえて手の解剖図に変更している。図⑤ではルーベンスのプロメテウスや古代のラオコーンを意識したポーズが採用されている。教養人が見れば理解できるという”競合”の脈絡でも理解できる絵であり、総督秘書官に買い上げてもらう意図で描いた。図⑥は生涯をかけて追求した聖書を題材とする作品の頂点のひとつを示す作品である。キリストの予言どおり、キリストを知らないと三度嘘をついたペテロの困惑ぶりを、蝋燭の光に照らされた顔のしわの周囲の影が見事に伝えている。右上におぼろげに描かれた振り向くキリストの姿が表現効果を高めている。「魂の画家」と呼ばれる彼の本領が、ここにある。

彼自身は自分の使命は歴史画家であるとしていた。それはバロック時代の絵画の序列において最も格が高いとされたのが歴史画家であったためである。その一方でレンブラント没後に自分たちの先駆者として時代ごとに異なる多種多様なイメージで語られたことは、レンブラントの芸術の多面性と普遍性を物語っているといえるだろう。（平松）



④ レンブラント・ファン・レイン
《テュルプ博士の解剖学実習》1632年



⑤ 同《眼を潰されるサムソン》1636年



⑥ 同《ペテロの否認》1660年



AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

■理事会から

■通常総会、6月8日(日)に開催

08年度通常総会が6月8日(日)15時30分から芸文センター12階アートスペースAで行われました。出席者は委任状提出者を含め185名で、議案は原案通り、承認されました。

なお、総会に先立ち、狩野博幸同志社大学教授の特別講演「円山応挙がなんぼのもんじゃ！ー曾我蕭白」を聴きました。

■会員拡大にご協力を！

7月末にお送りしました「タイムスケープ」展の事業案内でも触れましたが、改めて会員拡大へのご協力をお願いします。今年度4月から8月末までに手続きを行った継続会員、新規会員は合計212名です。06年度、07年度の同期間はそれぞれ231名、264名で、今年度は大幅に出遅れています。原因はいろいろあるでしょうが、友の会が円滑な事業活動を行っていくためには一定数の会員確保が不可欠です。繰り返しになりますが、入会の呼び掛けをよろしくお願い申し上げます。

友の会会長 太田幸一

■友の会活動紹介

「杉本健吉展」
4月 特別鑑賞会(昼・夜)
5月 他館鑑賞会(三重県美術館) ☆
5月 講座 ロココ美術:ヴァトーとブーシェの絵画(栗田氏) ☆
「誌上のユートピア」展
6月 総会 ☆
6月 講座 曾我蕭白(狩野氏) ★
6月 特別鑑賞会(昼・夜)
6月 講座 ロココ美術:シャルダンとフラゴナールの絵画(栗田氏)
「タイムスケープ」展
8月 特別鑑賞会(昼・夜)
9月 ナイトカフェ(2回) ☆

定例活動
美術館モニター のべ2回
所蔵作品管理 のべ12回 ★
杉本健吉 平家物語の絵と掲載誌の照合
おもしろ・座布団・ピロッドクッション製作
さらし・手袋の洗濯
収蔵作品フォルダー・カードの作成
発送 のべ4回
受付 のべ12回
ナイトカフェサポート のべ2回
会報発行 第27号発行
ホームページ 随時更新
★中面で紹介 ☆裏面で紹介



◎講座◎ ……………→

栗田氏によるロココ美術に関する講座が2回開催され、西洋の美術が日本芸術に与えた影響と、近代の日本人洋画家たちが日本の伝統美術に立ち返ったことを興味深く説明していただきました。



◀……………◎他館鑑賞会◎

今回は三重県美術館「金刀比羅宮書院の美」展へ。応挙の障壁画や初公開の《飛燕図断片》、若冲の壁面全体に四季の花が描かれた《花丸図》等々。書院は襖絵まで配置通りに再現され、見事な展覧会でした。



◀……………◎ナイトカフェ◎

今年で4年目となり、友の会の「夏の恒例行事」になりつつあるナイトカフェ。音楽を聴きながらグラスを傾ける「オトナの夜」の雰囲気好評で、多くの方の参加がありました。

…………… これからの企画展のご案内 ……………

ライオネル・ファイニンガー展

10月17日(金) → 12月23日(火・祝)

アンドリュー・ワイエス —創造への道程

2009年1月4日(日) → 3月8日(日)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

- 10階愛知県美術館受付
- 友の会事務局(火・木・金・土 10:00-16:00)
052-971-5511(代) 内線347
tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編 集 後 記 この「空中回廊」は、会員のための「機関誌」であると同時に、会の活動を会員以外の方々にも宣伝する「広報誌」でもあります。これら両方の性質を兼ね備えた内容にするため、毎号、工夫しながら編集しています。(森)

□編集 水野 愛子/平松 章子/森 健次/中田 賢
折戸 祥子/中塚 千佳/松下 智子
□協力 愛知県美術館企画業務課
□発行 2008年9月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市中区東桜一丁目13-2
愛知芸術文化センター内
TEL: 052-971-5511(代)内線347
FAX: 052-971-5617
E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館HP: http://www-art.aac.pref.aichi.jp